

最近の報道から

10月31日に以下の報道がなされました。これについて少し解説したいと思います。

千葉東方沖 念のため地震に注意を 10月31日 20時55分 (NHK)

千葉県東方沖では、今月、小規模な地震が相次ぎ、地下の岩盤の境目がゆっくりとずれ動く現象が観測されています。こうした活動は数年ごとに繰り返され、やや規模の大きな地震が起きることもあるため、気象庁は、念のため揺れに注意するよう呼びかけています。気象庁によりますと、千葉県東方沖やその周辺では、フィリピン海プレートという海底の岩盤が陸側の岩盤の下に沈み込んでいる影響で地震活動が活発になることがあり、26日ごろから小規模な地震が相次ぎ、千葉県で震度2や1の揺れを観測しています。また、国土地理院や防災科学技術研究所の発表によりますと、房総半島に設置している傾斜計やGPSの観測点では、26日以降、地下の岩盤の境目がゆっくりとずれ動く「スロースリップ」という現象とみられる僅かな地殻変動が観測されています。こうした活動は、平均で6年程度の間隔で繰り返し起きていますが、活動に伴ってマグニチュード4から5程度のやや規模の大きな地震が起きることがあり、前回、4年前の平成19年8月の地震活動では、最大、震度5弱の揺れを観測しました。気象庁は「今回の地震活動は過去の例よりも低調だが、念のため揺れに注意してほしい。また、3月の巨大地震の余震活動も引き続き活発なので、引き続き広い範囲で地震に注意してほしい」と話しています。

房総半島沖では、この「スロースリップ」と呼ばれる現象が1996年に初めて発見されました（これはGPSの観測開始が1996年のためです）。これまでは、この現象が大規模地震につながった例はありません。ただ、「スロースリップ」は、東海地震で想定されている「前兆すべり」と、同じプレート境界面でのすべりである事は事実であり、この変動が加速するか否かが最も重要な点です。ただ、現在の観測体制では、GPSデータの解析には最低2時間はかかりますので、残念ながらそのような変動が発表される可能性は低いのが現実です（実際の現象は数時間以内で進行すると考えられています）。

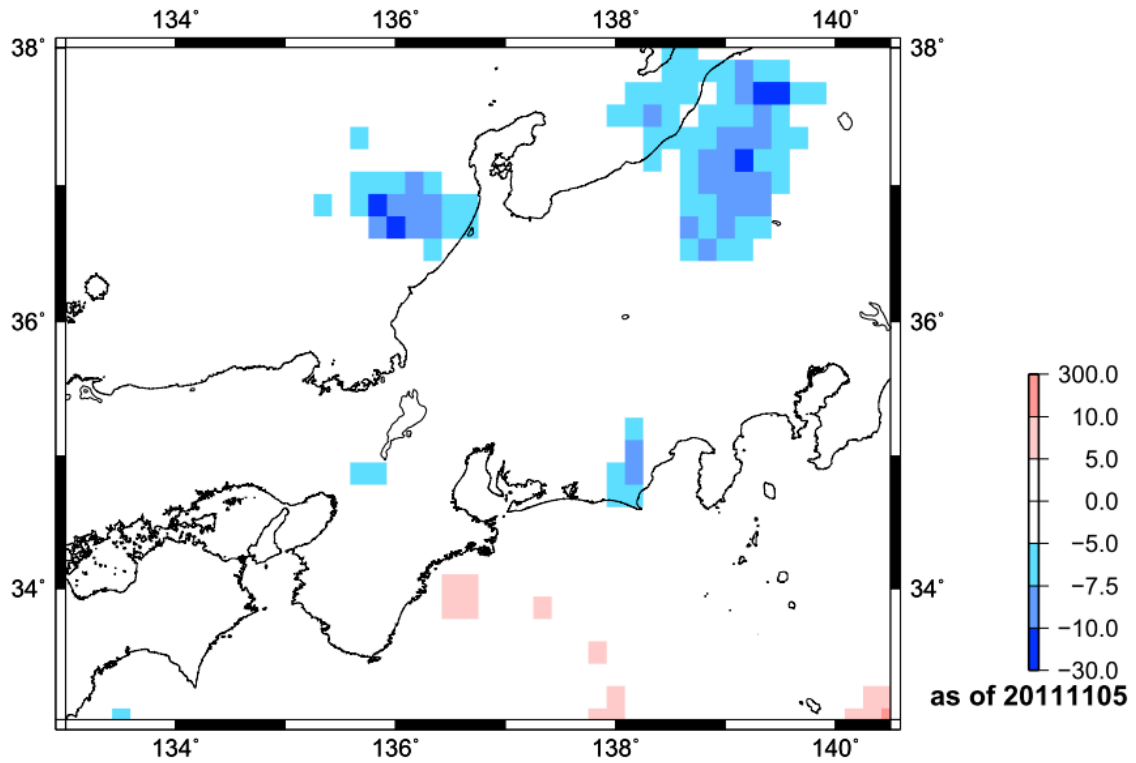
地震活動度の状況（地下天気図®）

3月11日の東日本大震災の影響で、日本列島全体の状態が大きく変わってしまい、特に東日本では、現在地震活動度解析がかなり難しい状態が続いています。もう少し余震活動が低下した段階で、東日本の解析を再開したいと考えています。

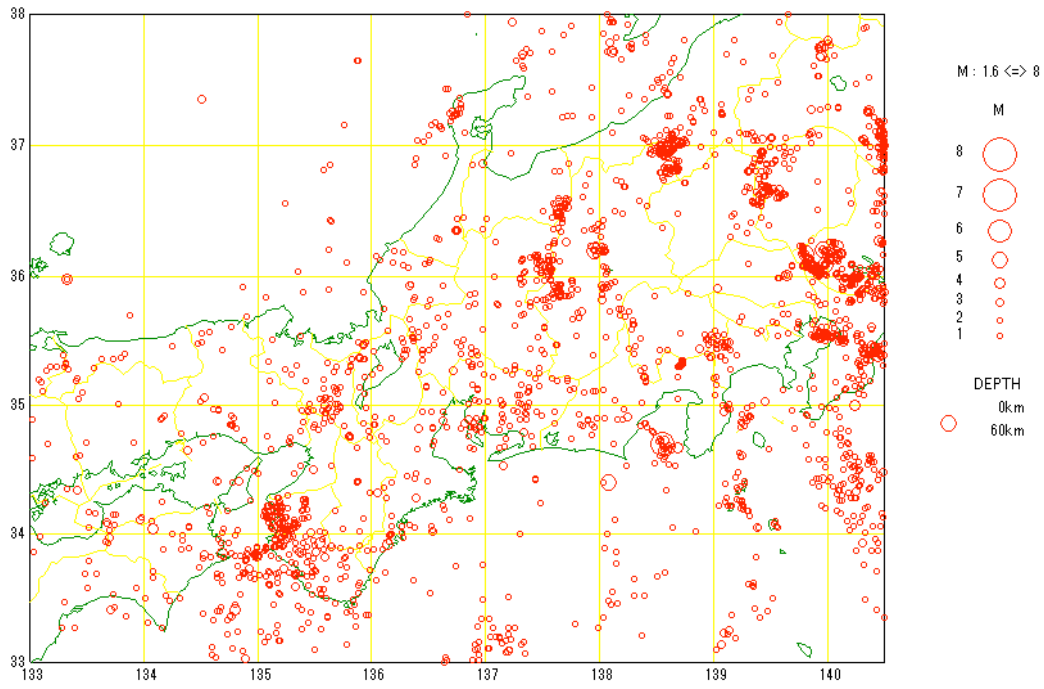
今日は関東・中部・近畿地方についての現状をお知らせします。

次ページの図は2011年11月5日の段階でのRTM地下天気図です。大きな（長期間継続する）異常はありませんが、少し注意が必要な場所が3か所あります。現在地震活動の静穏化（＝前兆と考えられる）領域として一番顕著なのが福島県西部から新潟県東部にかけての領域です。また石川県沖にも少し静穏化領域が見られます。静岡の静穏化領域はまだ現れてすぐの状態、今後の推移を見守っていきたいと思います。

R TM法による地下天気図（青い部分が地震活動が低下している領域＝異常）



下：上の地下天気図を作成するために使用した地震の分布



N= 2290

FILEdec_3k7dJMA20010101-20111105_33-38_133.0-140.5_M16-80_D0-60.seis

// SEIS-PC //